

* 五〇六〇 「人境」

五〇六一 夫れ人は一小物を以て、一短期を得る、

五〇六二 彈丸の如く實結する者を得て之を踏む、

五〇六三 瑠璃の若く清虚する者を見て之を仰ぐ、

五〇六四 明暗は相い換る、寒暑の相い推す者を時にして之を経る、

五〇六五 乾潤は相い生ず、動止の相い立つ者を侶にして之に依る、

五〇六六 我の麓體を以て。而して物の麓露を認む。故に

五〇六七 日月山海は、我の天地なり、
天は瑠璃の若く、地は彈丸の若くなるに由りて、之を觀れば。覆う者は天を爲す、
載る者は地を爲す、

五〇六八 然りと雖も。天なる者は、氣の名なり、而して

五〇六九 地なる者は、物の名なり、

五〇七〇 故に處を以て時に對すれば。則ち

五〇七一 時なる者は氣なり、天を爲す、

五〇七二 處なる者は物なり、地を爲す、
或いは天と呼ぶ、

五〇七三 猶お是れ此の一身。父に對して子と呼び、
或いは地と呼ぶ、

五〇七四 子に對して父と呼ぶがごとくなり。各會する所有るなり。故に

五〇七五 瑠璃の如き天、

五〇七六 彈丸の如き地は、則ち天地を物中に開きて有り。

五〇七八

五〇七九

五〇八〇

五〇八一 八二

(I 435a)

五〇八三一八五

五〇八六

五〇八七

五〇八八

五〇八九一九〇

五〇九一―九二

五〇九三

五〇九四

五〇九五

五〇九六

次第しだいに相あい開ひらく。則すなわち天地てんちは愈いよいよ有あり。而しかして氣物きぶつは愈いよいよ瑣さなり。

晝夜ちゅうや冬夏とうかは、我われの期き紀きなり、

水燥すいそうの中ちゆうに於おいて網縊いんうんす、

動植どうしよくの物ぶつに於おいて相あい依よる、

天地てんちは塊塊おちおちに物ぶつす、而しかして萬物ばんぶつは其その中ちゆうに竝ならび立たつ、

歲月さいげつは衰衰こんこんに期きす、而しかして衆期しゅうきは其その間かんに競きそい走はしる、

時じは處しよに時じす、

處しよは時じに處しよす、

期きは物ぶつに期きす、

物ぶつは期きに物ぶつす、

(PB 370)